



Title	自由党の衰退と反攻 : 19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙
Author(s)	岡田, 新
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 173-194
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99286
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自由党の衰退と反攻 —19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

岡 田 新

I

アイルランド自治問題を契機に分裂した自由党は、19世紀末に深刻な危機に直面した。1886年に分裂した自由党は、1892年選挙で若干の議席を回復したもの、1895年、1900年総選挙では保守党と自由統一党に大きくリードされ、議会では惨めな少数派に転落した。自由主義は19世紀末に死に瀕していたとさえ考えられたのである。

しかし別の機会に論じたように⁽¹⁾、選挙結果を仔細に調べると、議席の大嵐な減少に比して、自由党の得票率の低下は軽微であった。議席の減少は、主として保守党と自由統一党の戦術的な連携によって自由党支持層が抑え込まれた結果であった。自由党の支持者の大部分は、グラッドストーンのアイルランド自治を政策として受け入れ、引き続き自由党を支持していたのである。

1892年、1895年、1900年の選挙においても、自由党の支持基盤は、必ずしも崩壊に向かっていたわけではなかった。無投票当選は、圧倒的に保守党・自由統一党に独占されるようになったものの、保守党と自由党が対決した選挙区では、自由党への支持は大きく崩れることはなく、増大する場合すらあつた。草の根のレベルでの自由党の党勢は、必ずしもウェストミンスターの議場ほどには崩落してはいなかつたのである。⁽²⁾

しかし19世紀末の自由党の選挙におけるパフォーマンスには、著しい地域

差がみられた。⁽³⁾ 後にみると、自由党は、ロンドンや、イングランド北部、スコットランドなどの地域では大きく議席を減らした。一方、ウェールズなどでは、自由党はほぼその党勢を維持し続けた。

こうした地域差は何を物語っているのか。どのような要因が影響を及ぼしていたのか。自由党衰退と再生の実像を捉えるためには、こうした点に分析を進める必要がある。本稿は、こうした課題に迫ってゆくために、地域別の議席と得票の変動を整理し、全国的変動を分析した先の論稿を補おうとするものである。

19世紀末の総選挙の政治地理については、ヘンリー・ペリング (Henry Pelling) による包括的な研究がある⁽⁴⁾。ペリングは、19世紀末のイングランドとウェールズのすべての選挙区を対象に、イギリスの政治地理を包括的に描き出した。選挙区のレベルにまで降りて草の根の政治状況を分析した研究として、ペリングの研究は今なお他の追随を許さない。

しかしへリングの場合、地域的な特性を析出することに力が注がれていた。このため得票や議席の時系列的な変化を分析するという観点は、副次的なものにとどまっていた。例えばペリングは、この時期全体にわたる保守党の平均的な得票率を推計して、地域の政治特性を表す指標としている。その際、無投票当選の多かった1886年総選挙や、1910年12月総選挙は集計の対象から除外された。他の総選挙での無投票当選についても、前後の総選挙の実績から保守党の支持票が推計された。さらに無所属候補への支持票は、自動的にその半分が保守党支持票であるとみなされた。ペリングは、こうした操作によって、無投票当選や立候補者の数など、選挙ごとに異なる要因を捨象し、潜在的な保守党の支持基盤の厚みを推し測って、各地域の政治的特性を浮き彫りにしようとしたのである。

だが現実の選挙でおこった得票や議席の変動を分析しようとする場合には、これとは違った角度から選挙統計を検討することが必要となる。実際の選挙戦では、どの政党がどのように対決するかによって、得票や選挙結果は大きく変わる。特に第三次選挙法改正後のイギリスでは、大多数の選挙区が小選

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

挙区制となり、こうした選挙区では相対多数をとった候補が議席を制した。こうした制度の下では、わずか数パーセントの得票の違いで議席に入れ替わる。選挙における対決の構図、何人の候補者がどのように争うかが、議席と得票を決定的に左右した。現実の得票や議席の変化を捉えるためには、こうした政党の対決の構図を組み入れて選挙統計を分析することが必要となる。

そこで本稿では、ペリングの分析を踏まえつつ、さらに政党の対抗関係を組み入れて、各地域の得票と議席の変動の様相を検討することにしたい。

II

この時期の全国的な議席数や得票率の変動の様相については、別稿ですでに一応の整理をおこなったが、ここでは、改めて地域別に集計してみよう。

表1は、地域別の議席数の変動を示したものである。見られるように、自由党分裂後の1886年総選挙では、自由党はすべての地域で議席を落とした。イングランド南東部では6議席全部を失い、ウェセックスでは8議席が1議席に、ミッドランド西部では32議席が7議席に、イースト・アンггリア、デボン、ブリストルの議席は3分の1に、ロンドン、セントラル、ミッドランド東部、ランカストリアでもほぼ議席が半減した。

惨敗の中でもかろうじて踏みとどまった地域もあった。イングランド北部では、26議席中2議席を落としたに過ぎなかった。ウェールズでも29議席のうちの3議席、ヨークシャーでも27議席のうちの4議席をとりこぼしたにとどまった。スコットランドでは51議席から43議席に7議席を落としたものの、依然強い勢力を維持し続けた。

1892年選挙では自由党の党勢は一時的に回復したが、多くの地域ではその後再び勢いを失った。ロンドンでは、1892年には1886年の議席の倍もの議席をとって1885年の水準を回復したが、1895年には再び1886年の水準以下に落ち込んだ。ヨークシャー、イングランド北部、スコットランドでも、1892年の選挙で相当の回復をみせたが、その後の選挙では議席を減らし続けた。セ

岡田新

表1 1885年～1900年総選挙における地域別の自由党獲得議席数

	議席数	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年	1885-1886 増減	1886-1900 増減
London	57	23	11	22	8	8	-12	-3
South-East	55	6	0	2	1	3	-6	+3
East Anglia	24	15	5	13	7	9	-10	+4
Central	23	14	7	16	3	7	-7	0
Wessex	18	8	1	3	2	0	-7	-1
Bristol	22	14	5	9	3	7	-9	+2
Devon & Cornwall	20	12	4	9	8	9	-8	+5
West Midland	42	32	7	7	4	6	-25	-1
East Midland	32	24	13	20	14	14	-11	+1
Peak-Don	12	9	8	9	8	7	-1	-1
Lancastria	76	29	14	28	11	14	-15	0
Yorkshire	40	27	23	26	20	19	-4	-4
North England	33	26	24	26	22	17	-2	-7
Wales	34	29	26	31	25	27	-3	+1
Scotland	70	51	43	50	39	34	-8	-9
University	7	1	0	0	0	0	-1	0
City of London	2	0	0	0	0	0	0	0
計	567	320	191	271	175	181	-129	-10

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の一人区および二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
4. 数字は議席数を示す。Lib/Lab や Lib/crafter の候補を含む。Independent Liberal の候補は省く。増減の数字は1886年から1900年の増減を示す。

ントラル、ウェセックス、ランカストリアでも、1892年に若干の回復がみられたものの、再び1886年の水準にまで転落している。

これに対して1892年以後も自由党の勢いが回復していった地域もあった。イングランド南東部、イースト・アンгリア、ブリストル、デヴォン・コーンウォール、ブリストル、ウェールズ、イースト・ミッドランドなどでは、自由党は、1892年に一定の回復を示した後も、勢いを維持し続け、1900年総選挙でも1885年の水準には及ばないものの、1886年と比べれば議席を増やしたのである。

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

つまり1886年には、自由党はいずれの地域でも議席を減らしたが、1886年以後は、さらに議席を減らし続けた地域—ロンドン、イングランド北部、スコットランド、ヨークシャーなどと、議席の回復にある程度成功した地域—イングランド南東部、イーストアングリア、デボン・コーンウォールのような地域とがあったことが分かる。

次に各地域における政党の得票全体を投票総数で割った得票率をみてみよう。(表2)すると議席の変動よりもさらにくっきりとした地域差が見て取れる。まず1885年総選挙と1886年総選挙を比べると、自由党は、デボンで17.6%、ダラムで18.1%も得票率を下げ、ミッドランド西部でも10.4%、セントラルで8.1%、ウェセックスでも7.6%得票率を下げた。

議席を大幅に減らした地域でも、得票率の低下は比較的小幅であった地域もあった。ミッドランド東部では、得票率の低下はわずかに1.4%、ランカストリアでも0.7%に過ぎなかったが、議席は半減した。スコットランドでは、自由党の得票率は全体としてはむしろ0.3%上昇しているのに、8議席を落とした。これは小選挙区制のもとで二大政党がしのぎを削っている場合、わずかな得票率の変化で議席がかわることを反映している。

1886年総選挙以後多くの地域では自由党は得票率を落としている。ミッドランド東部では5.9%、ヨークシャーで5.3%、ランカストリアで4.2%、イングランド北部で3.6%、スコットランドで3.5%、ロンドンでは2.4%自由党の得票率はさらに減少した。ロンドンでは1892年にいったん4.5%も得票率を増やしたものの、その後大きく後退している。ランカストリアやイングランド北部も同じような動きを示した。ヨークシャーやミッドランド東部、スコットランドでは、1892年の反発は限られ、自由党の得票率はするすると後退を続けた。

しかし1886年以後、自由党の得票率が増大していった地域もあった。最も著しい例はデヴォン・コーンウォールで、1886年と1900年とを比較すると、10%以上も得票が増大し、1900年総選挙には、1885年の水準には及ばないものの、1886年での失地を相当に回復している。ウェセックスでは、1886年以

表2 1886年～1900年総選挙における地域別の自由党得票率(%)

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年	1885- 1886 増減	1886- 1900 増減
London	46.3	42.3	46.8	43.1	39.9	-4.0	-2.4
South-East	43.3	38.0	39.6	39.7	34.3	-5.3	-3.7
East Anglia	54.7	48.7	52.0	48.4	49.6	-6.0	+0.9
Central	54.6	46.5	51.0	47.4	49.8	-8.1	+3.3
Wessex	48.9	41.3	46.6	48.5	45.3	-7.6	+4
Bristol	52.8	46.8	49.2	46.9	51.0	-6.0	+4.2
Devon & Cornwall	54.5	36.9	48.7	49.8	49.7	-17.6	+12.8
West Midland	54.8	44.4	40.7	41.2	46.5	-10.4	+2.1
East Midland	56.5	55.1	52.1	50.2	49.2	-1.4	-5.9
Peak-Don	57.7	54.7	56.1	54.3	52.9	-3.0	-1.8
Lancastria	47.8	47.1	47.9	43.0	42.9	-0.7	-4.2
Yorkshire	55.9	53.7	53.1	50.7	48.4	-2.2	-5.3
North England	58.4	53.0	54.9	53.6	49.4	-5.4	-3.6
Wales	58.3	53.9	62.8	56.8	58.5	-4.4	+4.6
Scotland	53.3	53.6	53.9	51.7	50.1	0.3	-3.5
University	46.3	28.2				-18.1	
City of London							

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の一人区および二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
4. 数字は得票率をしめす。政党の分類については表1と同じ、増減は1886年から1900年の増減を示す。
5. University, City of London の空欄は、自由党候補者が立候補しなかったことを示す。

後、自由党はさらに議席を減らしたものの、得票率は4%も伸び、1900年には1885年の水準に近づいている。セントラルでも、議席は変わらなかつたが、1886年以後得票率は3.3%のびた。ウエスト・ミッドランドでも、議席は1つ減らしているものの、得票率は2.1%増大し、ブリストルでは、1886年以後議席は2議席増やし、得票率は4.2%回復し、1885年の水準をほぼ取り戻している。特異なのはウェールズで、ここでは、1886年から1900年にかけて4.6%

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

自由党の得票は増大し、1900年には1885年の水準を上回っている。だが小選挙区のもとでは、得票率がいくらかのびても、相対多数を取れなければ議席をとることはできない。このため、こうした得票率の増加は、大幅な議席増には必ずしもつながらなかつたのである。

こうして議席と同じく得票率についても、1886年以後後退を続けたミッドランド東部、ヨークシャー、ランカストリア、イングランド北部、スコットランド、ロンドンなどと、1886年以後得票率を回復したデボン・コーンウォール、ウェセックス、ウエスト・ミッドランド、ブリストル、ウェールズといった地域があり、その違いは、議席よりもさらに大きなものだったことが判明する。

以上のような観察からも、1886年の自由党分裂後、自由党の後退には、顕著な地域差があったことがわかる。幾つかの地域では、自由党は1886年総選挙以後さらに後退を続けていた。しかし別の地域では、自由党の得票は1886年以降増大し、議席の上での成果は限られていたが、反攻のきざしをみせていたのである。

とはいっても、繰り返し指摘しているように、議席についても得票率についても、無投票当選の有無や政党の対決図式を考慮せずに、単純集計して得られた数は、必ずしも政党の支持を正確に反映していない。実際には政党の対決パターンによって、議席はもちろん、得票も変わる。次に政党の対決パターンを視野にいれて分析を深めてみたい。

III

この時期の主要な政党は、保守党と自由党、そして1886年選挙で自由党から分裂して誕生した自由統一党、1900年総選挙から登場する労働党の4つであった。もっとも労働党は、1906年選挙まで、労働代表委員会 Labour Representation Committee を名乗っていた。(また1900年総選挙以前には、独立労働党が候補をたてていたが、これは20世紀の労働党とは質的に異なる存在であつ

た。ただし独立労働党は小さいながらも、19世紀末に無視できない票を集めていたため、後出の表には、比較の便宜のために、独立労働党の候補も「労働」の欄に掲出している。)

さてこの4つの政党が対決する場合、理論的にはさまざまな組み合わせがありうる。だが相当な比重を占めていた無投票当選を除いて、実際に選挙が闘われた投票が行われた選挙区では、保守党と自由統一党が争うことはほとんどなく、自由党と労働党が争うこともまれだった。自由党と保守党、そして自由党と自由統一党の一騎打ちが、無投票と並んで、選挙戦の支配的なパターンであった。

実際、この時期の一人区における政党の対決パターンを調べると、無投票当選は、1886年に18.05%、1892年には7.16%、1892年には23.60%、1900年には30.95%も占めていたが、保守党・自由党の一騎打ちないし自由統一党・自由党の一騎打ちが占めていた比率は、1886年に70.6%、1892年で87.82%、1895年には70.41%、1900年でも67.95%にものぼっている。二つのタイプの一騎打ちと無投票当選をあわせると、実に選挙区の93%から98%を占めていた。もつとも19世紀末には、独立労働党のような労働者政党が登場ってきて、労働者政党が選挙にからむ選挙区が散見されるようになっていた。

二人区の対決パターンは、一人区よりやや複雑であった。しかしここでも、無投票が1886年に20%、1892年に12%、1895年に12%、1900年には24%もあった。そして保守党と自由党候補が対立するパターンに、保守党・自由統一党のペアと自由党が闘うパターン、そして自由統一党と自由党候補が争うパターンをあわせると、1886年、1892年ではおよそ80%、1895年でも68%、1900年には54%を占めている。

こうした政党の対決パターンは、選挙結果にどのような影響を及ぼしていたのか。まず無投票当選について検討してみよう。次表に掲出したのは、地域別の無投票当選者である。括弧内は、自由党の無投票当選者の数を示している。

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

表3 1885年～1900年総選挙における地域別の無投票当選者数

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年	1885- 1886 増減	1886- 1900 増減
London	0	4(0)	4(0)	9(0)	11(0)	4(0)	7(0)
South-East	0	31(0)	5(0)	33(0)	31(0)	31(0)	0(0)
East Anglia	0	5(0)	0	2(0)	6(0)	5(0)	1(0)
Central	0	5(0)	0	2(0)	7(0)	5(0)	2(0)
Wessex	0	5(0)	5(0)	10(0)	6(0)	5(0)	1(0)
Bristol	0	5(0)	2(1)	5(1)	8(0)	5(0)	3(0)
Devon & Cornwall	0	4(2)	1(0)	3(0)	6(2)	4(2)	2(0)
West Midland	2(2)	19(2)	7(2)	20(1)	27(1)	17(0)	8(-1)
East Midland	0	9(0)	9(3)	3(0)	6(1)	9(0)	-3(1)
Peak-Don	0	1(1)	1(1)	6(3)	3(1)	1(1)	2(0)
Lancastria	1(0)	17(2)	2(0)	14(2)	24(3)	16(2)	7(1)
Yorkshire	0	10(5)	1(0)	4(0)	8(0)	10(5)	-2(-5)
North England	2(2)	11(9)	1(0)	1(1)	6(4)	9(7)	-5(-5)
Wales	4(4)	12(9)	4(3)	2(2)	11(10)	8(5)	-1(1)
Scotland	5(5)	9(7)	7(0)	5(1)	3(0)	4(2)	-6(-7)
University	6(1)	6(0)	7(0)	7(0)	7(0)	0(-1)	1(0)
City of London	0	2(0)	0	2(0)	2(0)	2(0)	0(0)
	20(14)	155(37)	56(10)	128(11)	172(22)	135(23)	17(-15)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の一人区および二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
4. 数字は無投票当選者数を示す。括弧内の数字は、うち自由党の無投票当選者の数。

別稿でも指摘したように、全体としてみると1886年の自由党の分裂以後、自由党の無投票当選者が減少する一方、保守党・自由統一党の無投票当選が激増した。

1886年選挙は、1885年選挙からわずか10ヶ月たらずで実施されたため、1885年選挙に比べて無投票当選は135議席も増えた。しかしそのうち自由党の無投票当選のわずかに23議席増えたにすぎない。無投票当選のほとんどは保守党と自由統一党の候補者であった。

岡 田 新

その後1900年までに無投票当選は、さらに17議席増えたが、自由党の無投票当選は逆に15議席減り、無投票当選の9割が保守党・自由統一党に占められるにいたる。その結果、1885年には、保守党・自由統一党の無投票当選はわずかに6議席であったのに、1900年には150議席にも膨らんでいる。無投票当選による保守党・自由統一党の議席の増大は、差し引き144議席にもおよぶ勘定になる。

地域別にみると、ロンドンでは、1885年には無投票当選は0だったのに対して、1886年には4議席、さらに1900年には11議席になり、そのすべてが保守陣営で自由党の無投票当選者は一人もいない。自由党の議席の減少が著しいウエスト・ミッドランドでは、無投票当選が1885年の2議席から1886年には19議席に増え、1900年にはさらに27議席に増えているが、そのうち26議席が保守・自由統一党であった。ランカストリアでも、無投票当選は1885年の1議席から、1886年には17議席に、そして1900年には24議席に増大し、うち21議席が保守陣営であった。イーストアングリアでも、1885年に0だった無投票当選は、1886年には5議席に増え、1892年には一旦無投票は0になるものの、1900年には6議席に戻り、そのすべてが保守・自由統一党であった。最も劇的なのはイングランド南東部であり、1885年には無投票当選は0だったのに、1886年には一挙に31議席になり、1892年には5議席に減るが、1900年には再び31議席となり、そのすべてが保守陣営の議席であったのである。

自由党が保守党より多くの無投票当選を維持できたのは、イングランド北部とウェールズだけだった。イングランド北部では、1885年に2議席の自由党が無投票当選だったが、1886年には無投票当選は11議席でうち自由党が9議席、1895年には無投票当選は1議席でうち自由党はゼロ、1900年には無当選は6議席で自由党がうち4議席を占めていた。ウェールズは、無投票当選が圧倒的に自由党の側であった点で、他の地域とは異なっていた。

こうして保守党、および自由統一党の無投票当選の増大が、自由党の議席の減少の最も大きな原因であったことは、疑いを入れる余地がない。1886年以後自由党の議席が減り続けていった地域—ロンドンでは保守党・自由統一

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

党の無投票当選が増え、イングランド北部、スコットランド、ヨークシャーでは、自由党の無投票当選者が減ることによって、自由党の議席が減少していった。一方自由党の議席が1886年以後回復していったイングランド南東部、イーストアングリアでは、無投票当選は1886年以後大きく増えていなかったのである。

IV

しかし自由党と保守党、自由党と自由統一党の一騎打ちの選挙区の結果を検討すると、この事態の裏側で進行していた自由党の反攻のきざしを見て取ることができる。次表は、自由党と保守党ないし自由統一党が一騎打ちで対決した一人区での自由党の獲得議席を調べたものである。

この表に示されているように、1886年総選挙では、保守党・自由統一党との一騎打ちの選挙区でも、自由党は大敗を喫した。1885年選挙では、自由党は争った選挙区の6割近くを手中に収めていたが、1886年には一騎打ちで争った365選挙区のうち3割5分にあたる130議席しか自由党はとることができなかつた。だが1892年には、454議席のおよそ4割8分にあたる218議席を奪い、1895年にも364議席のうちの3割7分にあたる136議席をとり、1900年では、341議席の4割2分にあたる144選挙区で保守党に競り勝っている。つまり自由党は、一騎打ちの選挙区では、1900年選挙でも、1885年の水準には及ばないものの、1886年の水準から見れば、対決した選挙区が24議席減少した中で14議席多い議席を奪っていたのである。

岡田新

表4 1885年～1900年総選挙における
自由党・保守党ないし自由統一党との一騎打ちの選挙区(一人区)の数と自由党議席数

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年	1885- 1886 増減	1886- 1900 増減
London	48(23)	52(11)	48(19)	43(8)	44(8)	4(-12)	-8(-3)
South-East	52(6)	21(0)	46(2)	19(1)	20(3)	-31(-6)	-1(3)
East Anglia	20(12)	14(3)	20(12)	18(6)	16(8)	-6(-9)	2(5)
Central	19(11)	15(5)	21(14)	19(2)	14(5)	-4(-6)	-1(0)
Wessex	13(5)	8(1)	12(0)	4(0)	8(0)	-5(-4)	0(-1)
Bristol	20(13)	15(5)	18(8)	13(1)	12(7)	-5(-8)	-3(2)
Devon & Cornwall	15(12)	11(2)	15(7)	13(6)	10(6)	-4(-10)	-1(4)
West Midland	40(30)	23(5)	31(5)	22(3)	15(5)	-17(-25)	-8(0)
East Midland	27(19)	19(9)	24(15)	25(12)	22(11)	-8(-10)	3(2)
Peak-Don	10(8)	11(7)	11(8)	6(5)	9(6)	1(-1)	-2(-1)
Lancashire	63(27)	50(12)	62(25)	43(7)	39(8)	-13(-15)	-11(-4)
Yorkshire	35(23)	26(14)	34(21)	26(13)	26(18)	-9(-9)	0(4)
North England	25(19)	18(9)	25(29)	28(20)	23(13)	-7(-10)	5(4)
Wales	28(24)	22(16)	28(25)	29(20)	20(15)	-6(-8)	-2(-1)
Scotland	36(30)	59(31)	59(37)	56(32)	63(31)	23(1)	4(0)
University	1(0)	1(0)				0(0)	-1(0)
City of London							
	452(262)	365(130)	454(218)	364(136)	341(144)	-87(-132)	-24(14)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の一人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
4. 数字は無投票当選者数を示す。括弧内の数字は、うち自由党の無投票当選者の数。

地域別に見ると、全体として自由党が議席を増やした地域—イングランド南東部、イーストアングリア、デボン、ヨークシャー、イングランド北部といった地域で、自由党は、1886年から反攻に転じ、保守党に競り勝つようになっていたことが分かる。イングランド南東部では1886年以後3議席を、イーストラングリアでは5議席を、デボン・コーンウォールでは4議席を、ヨークシャーでも4議席を、イングランド北部でも4議席を自由党は奪還したのであった。

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

表5 1885年～1900年総選挙における

自由党・保守党ないし自由統一党の一騎打ち選挙区(一人区)の自由党得票率

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年	1885-1886 増減	1886-1900 増減
London	48.47	42.11	48.34	43.51	41.16	-6.36	-0.95
South-East	43.43	40.03	40.75	43.04	39.96	-3.40	-0.06
East Anglia	53.46	47.61	50.80	48.27	49.18	-5.85	1.57
Central	53.12	46.56	50.30	47.06	48.40	-6.56	1.85
Wessex	48.53	44.09	44.89	47.84	44.36	-4.44	0.26
Bristol	52.48	47.04	48.73	45.44	51.16	-5.44	4.11
Devon & Cornwall	55.64	39.59	48.10	49.60	50.00	-16.05	10.40
West Midland	54.47	44.07	42.77	40.58	46.46	-10.40	2.39
East Midland	53.83	51.65	51.48	49.04	49.40	-2.18	-2.25
Peak-Don	59.75	54.39	55.74	54.40	52.27	-5.36	-2.12
Lancastria	48.64	47.72	48.16	45.49	45.32	-0.92	-2.41
Yorkshire	55.05	52.93	52.41	50.11	50.80	-2.12	-2.13
North England	58.26	51.27	54.40	53.42	51.40	-6.99	0.13
Wales	58.39	54.01	60.29	55.81	57.23	-4.38	3.22
Scotland	59.43	53.73	54.76	52.90	51.23	-5.70	-2.51
University	46.34	28.20					
City of London							
平均	52.38	48.09	49.84	48.51	48.21	-4.29	0.12

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の一人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
5. 数字は無投票当選者数を示す。括弧内の数字は、うち自由党の無投票当選者の数。

次に一騎打ち選挙区の得票率を分析してみよう。表は、自由党と保守党ないし自由統一党の一騎打ちの選挙区における自由党の得票率を地域別に示したものである。これをみると全体としては、1886年と1900年の自由党の得票率には、わずか0.2%しか増加していない。しかしデボンでは、1886年から自由党の得票率の増加は10%にも達しており、ブリストルやウェールズでもそれぞれ4%、3%以上増加している。自由党の得票率が50%を越していた地域は、1886年にはミッドランド東部、ピークドン、ヨークシャー、ウェール

ズ、スコットランドであったが、1900年には、ミッドランド東部が50%をきつたものの、ブリストル、デボンがこれに加わっている。さらにイーストアングリア、セントラルも50%に接近していた。

しかしたとえばロンドン、ミッドランド東部、ヨークシャー、ランカストリア、ピーク・ドン、スコットランドといった地域では、一騎打ちの選挙区でも、1886年以後、得票率は低下していた。自由党の反攻は、まだ限定的な地域のものであったことが読み取れる。

V

次に二人区における自由党のパフォーマンスを、政党の対決パターンを考慮しながら、地域別に集計して観察してみよう。表6から明らかのように、自由党分裂後の1886年選挙では二人区でも、自由党は保守党との一騎打ちで惨敗した。わずかにイングランド北部、イーストアングリアで議席をうかろうじて維持しただけだった。しかし二人区の場合には、自由党は1892年には早くも全国的に反攻に転じて1885年の水準を回復した。1895年には再びわずか4議席にまで失速したが、1900年には、14議席中6議席と勝敗の率ではほぼ4割にまで勢いを回復している。その意味で二人区でも、特定の地域では、自由党の反攻のきざしが明らかに存在していた。

しかし保守党と自由党の一騎打ち自体が減少したこともあるって、このカテゴリーにおける自由党の議席数はさほど増えてはいない。ここでは表には掲出しないが、別稿でも指摘したように、保守・自由党に労働者政党の候補がからんだ選挙では、自由党候補の得票率は30%や25%に落ち込む場合すらあり、三つ巴選挙になった場合には、二人区では、自由党の展望は決して明るいものではなかった。

表7は、一騎打ち選挙区の自由党の得票率をみたものであるが、これをみると、1886年からみると1900年には平均得票率は4%近く増えており、デヴォン・コーンウォールはもちろん、ランカストリアでも得票率は前進している。

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

しかしイングランド南東部では、1886年に異様なほど劇的に得票率が低下し、その後もわずかしか回復せず、イングランド北部の得票率は、1886年以後も相当に低下していることがわかる。

こうした二人区でも、自由党は反攻のきざしを見せながらも、1900年の時点では、イングランド南東部やイングランド北部での巻き返しにはまだ至っていないかったことがわかる。

表6 二人区における保守・自由一騎打ち選挙区の自由党議席数

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年
South-East	2	2	2	2	
East Anglia	4(3)	4(1)	4(1)	4(1)	2(1)
Central	2(2)		2(2)		2(2)
Wessex	4(2)	2	2(1)		2
Bristol	2(1)				
Devon & Cornwall	2	2	2(2)	2(1)	2(1)
East Midland	2(2)			2	
Lancastria	8(1)	8	10(3)	6	4(2)
Yorkshire	4(4)		4(3)	2(1)	
North England	2(2)	2(2)	2(1)	2(1)	2
Wales			2(2)		
Scotland					
University					
City of London					
	32(17)	20(3)	30(15)	20(4)	14(6)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
6. 数字は該当の選挙区数を示す。括弧内の数字は、うち自由党の当選者の数。

表7 二人区における保守・自由一騎打ち選挙区の自由党得票率

	1885年	1886年	1892年	1895年	1900年
South-East	40.97	18.20	26.72	24.85	
East Anglia	57.32	49.05	56.37	48.85	50.30
Central	70.19		60.63		55.47
Wessex	48.80	46.32	49.80		48.85
Bristol	49.03				
Devon & Cornwall	47.87	41.72	50.90	50.66	49.14
East Midland	77.00			46.95	
Lancastria	41.09	45.11	44.22	41.04	50.56
Yorkshire	64.88	74.95	69.71	65.61	
North England	70.55		60.97	62.54	41.24
Wales			91.14		
Scotland					
University					
City of London					
	46.4	45.6	54.0	47.46	49.41

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、大学の二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* に従う。
7. 数字は該当の選挙区における自由党の得票率の平均。

VI

こうした自由党の反攻のきざしとその限界は、補欠選挙の結果からも観察することができる。次に掲げた表は、1885年から1900年選挙にいたる補欠選挙の結果を、年毎に整理したものである。表からわかるように、自由党は補欠選挙でも決して一方的に負けていたわけではなく、保守党とほぼ互角に闘っていた。保守・自由の一騎打ちでは73勝67敗と勝ち越しており、自由統

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

表8 1886—1899年における補欠選挙の対決パターンと自由党の獲得議席

年次	保守・自由	自由統一・自由	保守・自由・労働	その他	無投票	総計
1886	14(7)			3(3)	44(20)	61(30)
1887	12(5)	5(4)			4(0)	21(9)
1888	10(4)	5(4)		2(1)	7(1)	24(10)
1889	10(7)	5(4)		1(0)	3(2)	19(13)
1890	6(3)	2(1)		3(3)	3(2)	14(9)
1891	15(7)	2(2)			7(0)	24(9)
1892	6(3)	4(4)		1(1)	26(21)	37(29)
1893	13(7)	2(1)	1(1)		4(2)	20(11)
1894	9(4)	2(2)	3(3)	1(1)	5(4)	20(14)
1895	5(2)	3(0)		3(1)	15(0)	26(3)
1896	3(2)	3(2)	1(0)	1(1)	2(0)	10(5)
1897	12(7)	1(0)	1(1)	1(1)		15(9)
1898	11(6)	6(2)		2(1)	6(0)	25(9)
1899	14(9)	1(1)		1(0)	7(1)	23(11)
総計	140(73)	41(27)	6(5)	19(13)	133(53)	339(171)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、1886年から1899年までの補欠選挙。
3. 数字は各対決パターンの補欠選挙における当選者の数。1886年（2選挙区）、1894年（1選挙区）、1899年（2選挙区）で2人区で2人の欠員を埋める補欠選挙があったため補欠選挙の数は、表の数より各々1886年（2）、1894年（1）、1899年（2）少なくなる。
4. 括弧の中の数字は自由党の獲得議席。

一党との一騎打ちでも27勝14敗で明らかに勝ちが多かったのである。ただし無投票では自由党は133議席のうちわずか53議席しかとれていない。

表9は、補欠選挙をパターン別に分類した上で、自由党の得票率と同じ選挙区での1886年総選挙での自由党の得票率との違いを集計したものである。補欠選挙は数が少ないので、個別の選挙の結果によって大きく平均が変わるために、解釈には注意が必要であるが、これをみると、保守党、自由統一党との一騎打ちの場合、1886年から1891年まで、むしろ自由党の得票率は増大し、3年ばかり若干減少したあと、再び1894年から1898年まで、得票率が増大していることがわかる。ボーア戦争が始まる1899年にはさすがに自由党の得票

岡田新

率は低下しているが、こうした補欠選挙での得票率の動向も、自由党が世紀末に一定の巻き返しに出ていたことをうかがわせる。

表9 1886—1899年における補欠選挙の保守・自由ないし自由党統一・自由一騎打ちの場合における自由党の得票率の1886年総選挙からの変動

年次	保守・自由
1886	2.88
1887	3.94
1888	4.32
1889	4.15
1890	5.94
1891	3.14
1892	1.06
1893	-0.55
1894	-0.39
1895	4.33
1896	1.34
1897	4.45
1898	5.39
1899	-3.32

注記

1. F.W.S.Craig(eds) *British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit* より作成。
2. 集計の対象は、1886年から1899年までの補欠選挙。
3. 数字は補欠選挙の数。括弧の中の数字は自由党の獲得議席。

VII

本稿での分析の目的は、19世紀末の自由党の選挙での地域別のパフォーマンスを、政党の対決パターンを組み入れつつ整理することにあった。ここで分析は、地域別の概観にとどまり、選挙区のレベルにまで踏み込んでい

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

ない。また社会的な要因—階級的な構成や宗教的な要因などと選挙結果の関係についても、分析の俎上にのぼせてはいない。

しかしここでの限られた分析からも、19世紀末の自由党が、全面的な敗走の過程にあったとは言えないことは明らかであろう。1885年以後続いていた自由党の議席の低迷は、主として保守党と自由統一党候補の無投票当選の増加によるものであり、保守陣営との一騎打ちの場合、いくつかの地域では、自由党は明らかに得票率を回復しつつあった。若干の地域では議席に競り勝つようにもなっていたのである。

もっともその反攻は、なおデボン・コーンウォールやブリストルなどの地域に限定されていた。ロンドン、イングランド北部、ヨークシャーなどでは、自由党は保守党との一騎打ちの場合にも、得票率を落とし続けていた。二人区でも自由党の一騎打ちの場合には得票率は増加しつつあったが、イングランド北部などでは、まだそうした反撃のモメンタムはみられなかった。

19世紀末は、一般に保守勢力の優位の時代として知られている。保守党政権の手で闘われたボア戦争は、植民地拡大をめざす帝国主義が新たな世紀の潮であることを、血なまぐさく予言していた。しかしここでみられるところ、自由党の反攻のきざしはすでに世紀末に見られていたのである。とはいえ、その反攻の地域はまだ伝統的に自由党のルーラルな基盤に限られていた。自由党が支配政党の地位を奪い返すためには、ロンドンやイングランド北部のような労働者の多い地域において、何らかの別の契機を手がかりに、本格的な巻き返しを始めることが必要だったと思われるのである。

注

- (1) 拙稿「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換—1886年総選挙における自由党の分裂」『グローバル・ヒストリーの構築と歴史記述の射程』、文部省科学研究費補助金基礎研究(A)(2)研究成果報告書、大阪外国语大学、2000年3月所収)。
- (2) 拙稿「19世紀末における自由党の衰退—1892年、1895年、1900年総選挙における政党の対抗関係—」(『国際社会への多元的アプローチ』大阪外国语大学、2001年3月所収) 参照。なお本稿は、19世紀末から20世紀初頭にかけての自由党の分裂

と危機、再生と解体の過程を選挙史研究という角度から検討する研究の一環であり、19世紀末の自由党の衰退局面を扱った上記拙稿を各地域の得票構造についての分析によって補完するものである。なおこの時期の選挙研究の全般的な問題の所在については、拙稿「選挙の歴史学」(『世界地域学への招待』、嵯峨野書院、1998年所収)およびこれに統計図表を補完した「近代イギリス選挙史研究序説」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国语大学、1997年所収)を、また筆者なりの分析の試みとしては、前掲の他、拙稿「自由党再生の地帯構造」(『英語圏世界の総合的研究』、大阪外国语大学、1993年所収)、「自由党再生の構図」(松田、阿河編『近代世界システムの歴史的構図』、渓水社、1994年所収)、「第一次大戦前の自由党と労働党」(『英米研究』、第19号、大阪外国语大学英米学会、1994年所収)を参照。この時期の政治史研究の全般的な動向については、拙稿「自由帝国主義と新自由主義」(一)(二)(『大阪外国语大学論集』第5号、第10号所収)、また拙稿「書評: Martin Pugh, *The Making of Modern British Politics*」(大阪外国语大学言語社会学会『EX ORIENTE』vol 9, 2003)、およびピーター・クラークの論文「近代イギリスの選挙社会学」(拙訳、『大阪外国语大学論集』第8号、第10号、第11号所収)を参照。

- (3) 前掲拙稿「自由党再生の地帯構造」参照。
- (4) Henry Pelling, *Social Geography of British Elections* (Macmillan, 1967). 統計の扱い方としては、こうした人為的な操作が、正確さを犠牲にしていることは否めない。ペリングは、もともと20世紀初頭の政治変動を、労働者階級の労働党への結集という伝統的な観点から捉えていた。だから、自由党の衰退や再生の基盤を掘り下げるといった時系列的な変動を探る観点は、二次的なものであった。例えばペリングは、議席の変動にもかかわらず、各地域における保守党支持が、この時期を通じて「顕著」な安定をみせていた、と結論づけている。しかし、それはあくまでも潜在的な支持についての仮定にすぎず、現実の選挙で顕在化した得票や獲得議席には大きな変動があった。ペリングのこの時期についての見方は、Henry Pelling, *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain* (Cambridge, 1968) を参照。
- (5) 政党的対決パターンについては、別稿でも紹介したが、念のため以下に一人区と二人区の対決パターンについての構成比を掲出しておく。

自由党の衰退と反攻—19世紀末イギリス総選挙と補欠選挙—

1885年～1900年総選挙
における政党の対決パターン(一人区)

対決パターン	1886年	1892年	1895年	1900年
保守・自由	254(49.13%)	350(67.70%)	285(55.13%)	276(53.38%)
自由統一・自由	111(21.47%)	104(20.12%)	79(15.28%)	65(12.57%)
保守・自由・労働	0	0	13(2.51%)	3(0.58%)
保守・労働	0	0	2(0.39%)	4(0.77%)
その他	7(1.35%)	26(5.03%)	16(3.09%)	9(1.74%)
無投票	145(28.05%)	37(7.16%)	122(23.60%)	160(30.95%)
計	517(100%)	517(100%)	517(100%)	517(100%)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランドの一人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, Social Geography of British Elections に従う。
4. 数字はそれぞれの対決パターンの選挙区の数をしめす。
5. 上記の労働には、労働代表委員会のほか、独立労働党を含めている。

1885年～1900年総選挙
における政党の対決パターン(2人区)

対決パターン	1886年	1892年	1895年	1900年
保守・自由	11(44.00%)	16(64.00%)	11(44.00%)	8(32.00%)
保守・自由統一・自由	5(20.00%)	4(16.00%)	2(8.00%)	3(12.00%)
保守・自由・労働	0	0	4(16.00%)	3(12.00%)
自由統一・自由	4(16.00%)	0	0	0
その他	0	2(8.00%)	5(20.00%)	5(20.00%)
無投票	5(20.00%)	3(12.00%)	3(12.00%)	6(24.00%)
計	25(100%)	25(100%)	25(100%)	25(100%)

注記

1. F.W.S.Craig(eds) British Parliamentary Election Results 1885-1918 op.cit より作成。
2. 集計の対象は、イングランド、ウェールズ、スコットランドの二人区。
3. 地域分類は、Henry Pelling, Social Geography of British Elections に従う。
4. 数字はそれぞれの対決パターンの選挙区の数をしめす。選出議員の数はこの倍となる。
5. 労働には、労働代表委員会のほか、独立労働党を含めている。

(6) 自由党と自由統一党が一騎打ちで対決した選挙区は、1886年に111選挙区（うち自由党は65議席を獲得）、1892年に104選挙区（自由党は68議席）、1895年には79選挙区（自由党は32議席）、1900年にも65選挙区（自由党は29議席）にのぼった。しか

岡 田 新

し数字が物語るように、自由統一党の候補者が減るに従って、自由党との一騎打ちの選挙区も選挙のたびに減った。その多くは、自由統一党候補のかわりに保守党候補が立つ形で、保守党と自由党との対決へと移行した。もともと自由統一党と保守党は選挙協定を結んでおり、一人区では、両者が競い合った例は皆無である。こうした点を考慮すると、自由統一党と自由党候補だけではなく、保守党候補と自由党候補との一騎打ち選挙区を加えて集計したほうが実態をよく表していると考えられる。